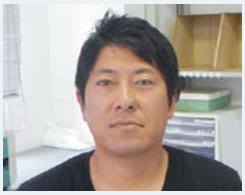
人と人が豊かにつながり、共に生きることのできる社会をめざして取り組んでいる皆さんに、それぞれの視点から見えてくる現状、そして「思い」や「願い」について語っていただきました。

あらゆる人権問題の解決にむけて取り組む

松村元樹さん(反差別・人権研究所みえ(ヒューリアみえ)事務局長)



誰かが面白半分で流した無責任な一言が、何千、何万と瞬く間に拡大していくインターネットの世界は、「差別の主戦場」といえる状況になっています。

このような背景を踏まえ、新型コロナウイルスに係る差別や誹謗中傷も「起こるべくして起こった」と考えています。もともと存在していた差別意識が、今回のことをきっかけにあぶり出されたのです。15年間にわたってインターネット上の差別的な書き込みの対策に当たってきて、今が最も深刻な状況だと捉えています。

差別の歴史(原爆症や水俣病、ＨＩＶ、ハンセン病など)を振り返ると、デマやうわさが広まり、ひとくくりにして排除や誹謗中傷を行うという基本構造がよく似ています。今回はそれに加えてＳＮＳ(ソーシャルネットワークサービス)が急速に普及し、思ったことを短い言葉ですぐ発信できるようになったことの影響も大きいと考えています。

一方、新しい流れも生まれています。新型コロナウイルスに関する膨大な量の差別や中傷の書き込みに対して、それに反対する意見も目立つようになりました。大手マスコミが早い段階から感染者や家族などへの誹謗中傷を「差別」と捉え、警鐘を鳴らしたことがその一因と考えられます。また、地道に続けられてきた人権啓発や教育によって人権意識が高まってきた人々が増え、ＳＮＳの広まりによって発信のハードルが下がることで「反差別」の意思表明や書き込みの増加につながったとも言えます。これまで主に自治体や公的機関が担ってきたネット差別への対応を、個人レベルでも取り組む人々が増えたと感じています。

いつかはこの事態も収束していくでしょう。しかし、その後が重要だと考えます。これまでの例からも、メディアなどで取り上げられている間はさまざまな場で話題になるものの、やがて人々の記憶から遠ざかり、一過性のもので終わってしまいます。

それぞれの深層にある意識が変わらなければ、今回起きてしまった差別や誹謗中傷は繰り返されてしまいます。だからこそ、鎮静化した後も、日常を通して自分たちの意識に「向き合い続けていくこと」にこだわっていきたいと思います。

さまざまな国の人たちが豊かに共生できる社会をめざす

田中レオニセさん(高茶屋日本語教室がんばる会代表)

新型コロナウイルス感染症に対する不安や恐怖心は、日本人も外国人も同じです。しかし、レジで並んだ時に、自分の後ろだけ印の２つ分間隔を空けて並ばれたり、商品を取ろうとした際、明らかに避けられたりしたことがありました。「外国人だから？」と感じ、悲しい気持ちになりました。

今、企業の業績が悪化し、多くの人が仕事を失っています。「自分たちは人としてではなく、都合のよい労働力としか見られていないのでは」と話す人もいます。外国人の多くは非正規雇用のため、その影響は大きく、今後さらに生活が苦しくなると思います。それは、リーマンショックの時も同じように感じたことです。しかし、今の状況では、解雇されて母国に帰りたいと思っても、帰ることすらできません。共に日本で暮らす仲間の「これから自分はどうなるのだろう」「どうやって生きていけばよいのだろう」という声は、多くの外国人の気持ちを表しているように思います。

だからこそ、私は日本人も外国人も、人として大切にし合えるつながりが必要だと感じています。

日本に来て28年。私は、日本語が話せないために苦しんでいる人の助けになれるよう、津市で暮らす仲間と共に、「高茶屋日本語教室がんばる会」を立ち上げました。がんばる会では日本語だけではなく、互いの文化や習慣を楽しく学び合っています。そうやって、さまざまな国の人たちが出会い、仲間としてつながっていく場所となるように、これからも続けていきたいと思っています。

今は人と人とが距離をとらなければならない社会となっていますが、日本で生活する外国人の一人として、その距離が“心の距離”にならないよう、できることをこれからもしていきたいと思っています。